

野村恭史著

『ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界——『論考』の生成と崩壊』（ナカニシヤ出版、2006年刊）

1. 近年、『論理哲学論考』（*Tractatus Logico-Philosophicus*, TLP）の日本語による研究書が相次いで刊行されている。疑いなく 20 世紀を代表する哲学書の一つであるにもかかわらず、『論考』を主題とした日本語のモノグラフは久しく末木剛博『ウィトゲンシュタイン論理哲学論考の研究』一つだけであって、英語圏に比してはなほ寂しい状況であった。しかし 21 世紀に入って、細川亮一『形而上学者ウィトゲンシュタイン』や野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』が立て続けに出版されている。そして、ここに新たに若い研究者による一冊が加わった。まことに喜ばしい。

本書の構成は次のとおり。第一章では『論考』成立に至る過程を見る。第二章では『論考』のいわゆる像理論と「形式」概念についての独特の解釈を呈示する。第三章・第四章では『論考』の概念記法、著者のいう言語 LW を、「構文論」と「意味論」という二側面から規定する。『論考』の「存在論」を論じる第五章では、要素命題や対象についての独自の解釈を与える。第六章では『論考』の論理哲学の哲学を扱い、それを「論理的客観主義」と特徴づける。最終章では、『論考』の崩壊過程を遺稿からの豊富な引用も交えて述べている。

本書の記述はおおむね明快かつ平易であり（ただし明晰ではない）、専門家でない読者にも理解はさほど困難ではあるまい。本書の最大の特徴は、ウィトゲンシュタインの概念記法（言語 LW）がある種のセンス・データ言語でありうるという興味ぶかい主張であろう。だがこの主張がもたらす結果として、『論考』の中心たる像理論にも特異な解釈が施されている。それとも関連するが、残念ながら評者は本書の解釈に『論考』テキストを軽視する傾向を感じた。著者の解釈がテキストの緻密な読解の上に組み立てられたものであるとは、評者にはとうてい思えないのだ。

本書は本文と註とを合わせ 285 頁におよぶ大部の労作であって、提出される論点は多岐にわたる。ここでは、評者の関心をことさら引いた著者の論点について私見を述べることで、書評子の責務を果たすことにさせていただきたい。それゆえ書評としていささか偏ったものとなるかもしれない。なお頁数は断りない限り本書の頁である。

2. いわゆる像理論は『論考』の柱の一つである。『草稿』（*Notebooks 1914-1916*, NB）の有名な剣戟図や自動車事故の再現（NB 24/9/14）、あるいは活人画（TLP 4.0311）や楽譜（TLP 4.013-4.0141）、言語の根底にある要素命題はこうしたものと全く同様の像（Bild）なのだ——評者は像理論をそう理解し、またこれが標準的解釈でもあろう。しかし本書は要素命題にかんして独特の解釈を提示する。例えば、像の典型として

著者は相撲の星取表という不思議な事例を挙げ (p. 41), この事例をもとに「形式」概念についての奇妙なスコラの区分を行うのだが、要素命題においては構造と形式が区別できず、よって「像の一般理論」が要素命題にそのまま適用できない結果となっている (p. 82)。要素命題が像の埒外となっているのだ。これは不可解と言う他ないが、問題は「形式」概念に留まらない。

著者は、要素命題を構成する名どうしの関係が内容を有する「実質的事実シンボル」であることを否定し、それは実質的内容を欠いた「形式的事実シンボル」なのだと主張する (p. 30)。だが私見では、著者のいう実質的事実シンボルという考えは『論考』の像理論のまさに中核に他ならない。例えば像という観念が導入される場面――

像の要素が一定の仕方で互いに関係しあっていることが、事物がそのような仕方で (so) 互いに関係しあっていることを表象する。 (TLP 2.15)

自動車事故の再現では、人形が人を、模型が自動車をそれぞれ代理し、それら像の要素がある位置関係にあることが、人と自動車が「そのような仕方で」関係しあうことを表象する。要素命題も像である以上、名がそこで一定の仕方で互いに関わりあうことが、対象が「そのような仕方で」互いに関わりあうことを描出する。すると名に関わりあう仕方が対象の関わりあう仕方を表現しており、『論考』においても名どうしの関係は実質的シンボルだと解する他ないはずだ (cf. TLP 3.1431-3.1432, 3.21)。 (むろん名どうしの関係は対象どうしの関係を指示する (vertreten) のではなく描出する (darstellen) のである。像理論の眼目たるこの点を著者は理解しないに見える (p. 34, pp. 68f.)) ところが著者は、上のような像の規定は「未分析な言語にたいしてのみ認められる」 (p. 272, n. 18) と述べて、要素命題が通常の意味で像であることを否定し、ついには像理論をたんなる真理条件説に同化するに至る。「像理論とは、真理条件の意味論にほかならない」 (p. 61) のだ。――すると真理関数もまた要素命題と全く同じ意味で像であることになろう。しかし真理関数が真理条件を有する仕方と要素命題が真理条件を有する仕方との間には根本的な相違があり、前者は後者に依存する。そして後者こそ像の観念が導入された所以ではなかったか。

かかる奇怪な立場に著者が追いやられたのは、分割記号法 (後述) に固執したためであろう。とはいえ実質的事実シンボルを拒否する直接の理由として著者は、それを変項に変えることができないという点を挙げている (p. 29)。これは理解に苦しむ。著者のいう実質的事実シンボル説 (その起源は言うまでもなくフレーゲの関数表現論にある) では、命題「fa」において性質 f を意味するのは文字「f」が名前の左にあるという事実である。「f」を「 ϕ 」に変えればこの事実はむろん消失する。しかし「 ϕ 」が名前の左にあるという新たな事実が代わりに現われ、これこそ f をはじめとする諸性質

を（フレーゲ流に言えば）不特定に暗示する、いわば可変事実（variable fact）に他ならない。それは図式であって変項ではない（？）と言うなら、図式と変項という現代的区別をウィトゲンシュタインは知るはずもなかった（し、知っていても拒否しよう）と言おう。たしかに性質の量化にさいして我々は「 $(\forall \phi) \phi a$ 」と書き、このとき量子子に付属するのは記号「 ϕ 」であって事実ではない。しかしこの「 ϕ 」は、どの可変事実を量子子が「束縛」するかを示すインデクスと見なされよう。（さらに言えば、『論考』において性質への量化はそれこそ一つの *façon de parler* である。）

3. ところで著者の形式的事実シンボル説では、命題「ソクラテスは死すべきものである」は例えば「 $s(\text{ソクラテス}, \text{可死性})$ 」へと分析されよう（ただし「 $s(x, y)$ 」は形式的「叙述要因」）。それゆえ著者も認めるとおり、タイプの侵犯を防げないという困難が生じてしまう（p. 30）。すなわち例えば、

(#) $s(\text{可死性}, \text{可死性})$

がなぜノンセンスなのかが説明不可能になるのだ。（余談だが、哲学者たちが意味に寄せる関心の半分も無意味にたいして寄せることのないのは、残念なことである。）実質的事実シンボル説を捨てて一方でタイプ理論をも拒否するなら、あとは我々の心の作用に訴える心理主義しか残されていまい。じっさい著者はその途を選んだ。

タイプの区別を侵犯して現われている記号は、それが適切な仕方では現われているときにもつと同じ意味をもちえない。なぜか。一般的文脈原理は、或る特定の文脈を記号の有意味性の条件とするが、この条件とは、当の記号がその意味を変えることなく有意味に登場しう文脈の多様性（構文論的多様性）のことである。この構文論的多様性と、当の記号にどんな意味を与えようかという意味論的多様性は、相互に制約しあっている。たとえば構文論的に二項述語としてふるまう記号は、いかなる三項関係をも意味しえず、或る性質を意味する記号は、その意味を変えることなく二項述語に代入されることはできない。こうした相互制約は、それを満たさない記号結合を理解することがわれわれには端的に不可能であるような制約であり、われわれのきわめて基礎的な言語的直観、われわれの言語能力の基層に由来していると考えられる……。 (pp. 35f.)

引用が長くなったが、著者が#の無意義であることを——つまり論理の問題を——最終的に我々の「言語的直観」に訴えて説明しているのは明らかだ（cf. p. 273, n. 22）。（これは『論考』解釈として提示されているが、著者自身の見解でもあろう。）言語主体の直観に訴えるこうした心理主義に対してはただちに、「ではそうした直観を欠いた者、

あるいは別種の直観を有する者にとっては、#は無意義でなくなるのか」と問うことができる。「直観」という概念それ自体が、こうした想定を許容せざるをえないのだ。(さらに言えば、こうした説明はせいぜい「なぜ我々は#を理解できないか」の説明でしかなく、「なぜ#は無意義であるのか」の説明になっていない。) 完全な明晰さを求めて直観や「自明性」を論理学から一掃せんとし、あのフレーゲをすら心理主義を免れていないと非難した(TLP 6.1271)はずのウィトゲンシュタイン自身、全くの心理主義者であったとは。

なお、上の引用で著者は、構文論的多様性と意味論的多様性が「相互に制約しあっている」(強調は引用者)と述べている。これは『論考』の考えではありえない。

論理的構文法では、記号の意味が役割を演ずることは決して許されない(TLP 3.33)

からだ。記号が何を意味しうかが記号の構文法から独立にあらかじめ定まっており、前者を参照することで後者が確立される、などということはいえない。これこそ『論考』におけるタイプ理論批判の眼目であった(TLP 3.331; cf. p. 271, n. 12)。(ちなみに実質的事実シンボル説はこの要求を充たしている。)

4. そもそも、『論考』が導入していると著者が主張する一般的文脈原理なるものにはテキストの支持があるのか。著者は、次の一節こそ一般的文脈原理の宣言なのだと言う(p. 32)。

命題のみが意義を有する。命題という連関においてのみ(nur im Zusammenhange des Satzes)、名は意味を有する。(TLP 3.3)

著者は、名が現れうる命題連関とそれが許されない命題連関とがここで対比されると解し、この節を「記号がその意味をもつのは、それが或る特定の文脈に或る特定の仕方では登場しているときのみである」(p. 32)という一般的文脈原理の表明とする。だが、この一節をそのように解釈できるか。否。この節で対比されているのは、名が単独で現れることと命題内部に現れることなのである。なぜならこの節は明らかに、対象をめぐる次の諸節、

事態の構成要素となりうるものがモノにとって本質的である。(TLP 2.011)

単独でそれ自体として存立しうるモノに後からある事態が適合するのであれば、それはいわば偶然と見えよう。……(TLP 2.0121)

モノは、可能な状況すべてに現れうるという点に限っていえば自立的であるが、

しかしこの自立的という形式は同時に、事態と連関してあるという形式、すなわち非自立的という形式である。(単独で、および命題の中で、と二つの異なる仕方
で語が現れることは不可能である。)(TLP 2.0122)

と関連づけて読まねばならないからだ。この一連の節で対比されているのは見てのとおり、モノが単独で現れることと事態のなかに現れることであり、2.0122 節ではこれが「単独で、および命題の中で」という語の二つの現れ方の対比に重ねられている。3.3 節を著者のように読むことはできず、一般的文脈原理にはテキストの支持がないと言わざるをえない。

しかし著者はこの一般的文脈原理に基づき、名のタイプ、「モールド」という観念を導入する (p. 77)。対象はそれぞれ固有の「結合形式」を有し、対象を意味する名はそれに応じて固有のモールドに属する。あるモールドの名が別のモールドの名の登場しうる場所に有意味に登場することはできないから、概念記法(言語 LW)においても名のモールドごとに異なる変項が用意されねばならない。しかし、こうした解釈も『論考』テキストに反する。

だから「x」という可変名 (der variable Name) が、〈対象〉というニセ概念に対する本来の記号である。

「対象」(「モノ」「物」など) という語が正しく使われているとき、その語は概念記法ではつねに可変名をつうじて表現される。…… (TLP 4.1272)

見てのとおり、〈対象〉という形式概念の記号は変項「x」だと言われている。すると「x」には対象を意味するすべての名が代入可能であることになる (cf. Letter to Russell, Jan. 1913)。もし名のあいだに相互代入不可能なモールドの相違が存在するなら、〈対象〉という形式概念の記号は「x」でありえない、否、そもそも〈対象〉なる形式概念にウィトゲンシュタインが言及することすらないはずだ。かくて、一般的文脈原理はとうてい『論考』の考えではありえないのである。(評者は当初、著者の一般的文脈原理はウィトゲンシュタイン中期以降の文法説と同じものかと思ったのだが、前者の根底にあるのが隠された (occult)「直観」である以上、両者はとうてい同一視できない。)

5. ラッセルの多項関係説についての論述にも、著者のテキスト軽視の傾向が現れている。1913 年の「論理に関するノート」(“Notes on Logic”, NL)における「命題の形式であるようないかなる事物も存在せず、形式の名であるようないかなる名も存在しない。……これはラッセル判断理論への批判である」(NL p. 105)という評言を、著者は多項関係説に対する「もっとも基底の」(p. 65)な批判とする。これは全く事実
に反する。まず、存在者としての命題形式とその名を導入することは多項関係説の本

質ではない。というのも、1910年の「真偽の本性」(“On the Nature of Truth and Falsehood”)や12年の『哲学の諸問題』(*The Problems of Philosophy*)における定式化では、ラッセルは形式とその名を導入していなかったからだ。形式とその名が初めて導入されるのは13年の『知識の理論』(*Theory of Knowledge*, TK)草稿であり、それも著者が述べるような過程を経てではなかった。存在者としての形式をラッセルが要請するに至った思考過程として、著者は三段階の奇妙な言語論的議論を提示する(p. 66)。この議論は正直なところ評者には理解困難であった。とりわけ「二項関係の一般形式」「例化された二項複合体の一般形式」「二項複合体」という三つの句の意味の異同が評者には全く理解できない。そもそも、名どうしの関係それ自体が何かの名、ラベルである——名が何かのラベルであるのと全く同様に——などという奇妙なことを(それがノンセンスでないとして)ラッセルが一度でも考えたとは思われない。それとも典拠があるのだろうか? いずれにせよ、ラッセルが形式という存在者を導入した理由はおそらく認識論的なものである。簡単に言えば、 aRb と判断するにはそもそも二項関係の何たるかを知らねばならず、一切の知識は直知(acquaintance)に由来する以上、二項関係の形式もまた直知の対象でなくてはならない、そうラッセルは考えたのだ(TK pp. 99, 116)。

ウィトゲンシュタインによる「もっとも基底的」な批判は別にある。それは、多項関係説ではノンセンスを判断することが可能になるというものである。

思うに、(例えば)命題「 A は a が b に対して関係 R にあると判断する」からは、それが正しく分析されるなら、命題「 $aRb.v. \sim aRb$ 」が他のどんな前提も用いることなく直接に帰結しなければならないことは明らかです。あなたの理論はこの条件を充たしていません。(Letter to Russell, June 1913)

正しい判断理論はどれも、この食卓はその本をペン軸と私が判断するのを不可能にせねばならない。ラッセル理論はこの要請を充たさない。(NL p.103)

命題「 A は p と判断する」のもつ形式の正しい説明は、無意義を判断するのが不可能であることを示さねばならない。(ラッセル理論はこの条件を充たさない。)(TLP 5.5422; cf. NL p. 95)

この批判は歴史的にもっとも早く、『知識の理論』草稿をラッセルに見せられた直後にウィトゲンシュタインが提示したものであり、のち「論理に関するノート」、さらに見てのとおりに『論考』それ自体でも繰り返されている(これに対し著者の挙げた批判は『論考』では姿を消している)。これこそが「もっとも基底的」な批判なのである。その本質は、かりに多項関係説が正しければ、

(b) J(A, この食卓, ペン軸, その本, γ)

という命題が、「この食卓はその本をペン軸る」という無意義を A が判断するという不可能な状況を即座に描出してしまうがゆえに、命題関数 J の代入項のタイプを制限する一種の「タイプ理論」が必要になる、という点に存する。この批判は、多項関係説が本質的に関係（性質）の名を必要とすることに関わり、存在者としての形式を導入するか否かとは無関係だ。（詳細に関して読者は、『科学基礎論研究』83（1994）所収の拙稿「言語論的転回——ラッセル判断理論とウィトゲンシュタイン」を参照されたい。）

この「もっとも基底的」批判を著者が無視した理由は理解できる。例の一般的文脈原理があれば、ウィトゲンシュタインのこの批判は空振りしかねないからだ。というのもラッセルの側は、一般的文脈原理によって多項関係説においても無意義の判断は回避されるのだ——なぜなら γ を「理解することがわれわれには端的に不可能である」（p. 36）から (?) ——と応じることができようから。それゆえ、一般的文脈原理を持ち出す著者の『論考』解釈がはなはだ疑わしいものとなるのである。

6. 著者によれば、『論考』の論理形式とは命題の、「それゆえ」事態のあいだの真理関数的な内的関係（ある命題が他の命題に与える確率）の総体である（p. 54）。すると、単独の命題とその表現する事態とが論理形式を共有するとじかに言うことができない。（命題とその意義とが真理関数的関係にあるとは意味不明だろう。）単独の命題と事態とが共有するはずの論理形式は、言語全体が世界全体と「共有」する内的関係のネットワークを通じて間接的に定義されるのみである。論理形式は写像形式の一種である（TLP 2.18-2.182）はずなのに。他方、ウィトゲンシュタインは『論考』4.121 節で「命題は現実の論理形式を示す」と述べた直後に、その実例を与えている。

それゆえ命題「fa」は、その意義のうちに対象 a が現れることを示し、二つの命題「fa」と「ga」は、両者において同一の対象が話題になっていることを示す。
……（TLP 4.1211）

要素命題「fa」は、他の要素命題「ga」と「gb」それぞれに対して同じ 1/2 の確率を与える。よって著者の解釈では、「fa」と「ga」との論理形式上の内的関係は「fa」と「gb」との内的関係と完全に同一である。しかし明らかに、「fa」と「ga」のあいだには「fa」と「gb」のあいだに存在しないある内的関係があり、その関係は二つの命題においてあらわに示されている。この違いはむしろ論理形式に関わるはずだが、著者の解釈では説明できない。

ともあれ、命題と現実が論理形式を共有するという『論考』の考えを著者は上のよ

うに解し、それを「言語についての像理論」(p. 15)と呼ぶ。だが、この言い回しをウィトゲンシュタイン自身が聞いたら激怒したのではないか。『論考』は言語全体について「像」という語を一度も用いていない。いったい、言語全体が世界全体の「像」であるなら、正しくない言語、すなわち世界の論理形式を誤って描写している言語がありうるのか。というのも「像は正しいか正しくないかであり、真または偽である」(TLP 2.21)から。否、そんなものはありえない。我々は論理において誤ることができない (TLP 5.473) からである。ここに論理の有する「客観性」の特異さがあるのだ。「言語についての像理論」という句はウィトゲンシュタインのこの洞察を無にするものであろう。

著者は『論考』の論理観を全体として「論理的客観主義」(p. 211)と特徴づける。論理的真理が真であるのは「世界がそのようなあり方をしているから」(p. 216)に他ならないのだ。では、世界が「そのようなあり方」(どんな?)をしていなかったら、論理的真理は偽だったのか。これはノンセンスだろう。——とはいえ著者の解釈には曖昧さがあって、一方でひどく「観念論的」(p. 271, n. 15)でもある。この緊張は放置されたままだ。

7. 著者は、ウィトゲンシュタインの概念記法(著者のいう言語 LW)がある種のセンス・データ言語でありうるとして、センス・データの記述をもたらすような要素命題の構成法を示しており、それが本書で分割記号法と呼ばれる独特の表記法である。これこそ本書の最大の特色、「最高点」(p. iv)であろう。周知のごとく、また著者も述べるように (p. 183)、概念記法がセンス・データ言語であるとする解釈は、少なくとも次の二つの困難を克服しなければならない。一つは、センス・データが『論考』のいう対象の必要条件を充たしうるように見えないという点、もう一つは、センス・データを記述する命題が要素命題の相互独立性という『論考』の要請を充たしうるように見えないという点である。この二つの困難を乗り越えようとする著者の果敢な試みが成功しているか否か、ぜひ(本書をご購入の上で)読者ご自身が確かめられたい。ここでは評者の素朴な疑問を述べておく。

分割記号法では、感覚質タイプが『論考』のいう対象になる (p. 186)。さて「空間や時間、色(有色性(Färbigkeit))は対象の形式である」(TLP 2.0251)とウィトゲンシュタインは述べる。「färbig」とは色がある、彩色されている、の意だろう。そこで著者は、感覚(視覚)質タイプは抽象的存在者ではなく色があるのだ(!)として、自らの解釈はテキストに適合していると見なす (p. 188)。だが一方で『論考』は「つけ加えるなら (beiläufig gesprochen)、対象には色がない (farblos)」(TLP 2.0232)と述べるから、著者はこれを何とか整合的に解釈しようと試みるのだが (p. 280, n. 70)、この試みは苦しまぎれと言う他ない。加えて、.0101のような感覚質タイプはさらにいくらかでも分割可能と見なされている以上 (p. 191)、『論考』のいう対象、すなわち論理的単純者ではありえないはずである。

また分割記号法において、要素命題は例えば「xyt4」という形式を有する。これは、視空間の点 (x, y) に時点 t において小数点以下第 4 位が 1 である視覚質タイプが現れていると語る。——では、この「4」という名は何を意味するのか？ 著者が考えるように、奇妙な仕方で分類された視覚質タイプ (のクラス) を意味する (p. 193) のか？ とすれば、それが論理的単純者だと考えるのは困難である。(p. 193, 図 3 で示されている「対象」はどう見ても複合的だろう。) しかしそれ以前に、この「4」は明らかに数詞として用いられているように評者には思われる。記号「4」がある視覚質タイプ (のクラス) を特定しうるのは、それが数詞として機能するからに他なるまい。そうでないと言うなら、数詞もしくは数詞と実質的に同等の表現をいっさい用いないで分割記号法を再定式化できなくてはならないはずだ。対象とは感覚質タイプなのかと初めは思ったのだが、対象とはけっきょく数なのだろうか？ しかし、要素命題に数詞が登場することは 1929 年の「論理形式について」(“Some Remarks on Logical Form”, SRLF) の記述に反するように思える。

すなわち、原子言明はその帰する度と同じ多様性を有しなくてはならず、ここから、数が原子命題の形式に入り込まねばならないことが帰結する。(SRLF p. 168)

こうした記述は、『論考』の段階では要素命題内に数(詞)が現れると考えられていなかったことを示唆しているよう。いずれにせよ、数は対象ではありえない。言うまでもなく、『論考』において数は論理的操作(真理操作など)のベキとして定義可能とされている(TLP 6.01-6.021, cf. 6.2) から。著者は『論考』の数論にいっさい触れないが、『論考』では数は要素命題に対する論理的操作とともに初めて登場するとされている以上、要素命題内部に数(詞)が現れるはずがない。——かくて評者の印象では、分割記号法はウィットゲンシュタイン中期の現象学的言語の候補ではあっても、『論考』とはほとんど関係ないものになっていると思える。しかも中期において相互独立性の要請はすでに破棄されているから、人工的きわる分割記号法はその意味を失ってしまう。

それでは対象とはいったい何であるのか。——それは『論考』の論理学を現実の日常言語に適用するときの問題であり、ゆえに論理学者たる自分の課題ではないとウィットゲンシュタインは見なしていた、そう評者自身は考えている(月並みで申し訳ないが)。しかし著者にとっては、対象が本当のところ何であるのかは大問題とならざるをえない。なぜなら、ウィットゲンシュタインは言語分析という方法を用いた存在論に従事していたのだと、著者は見なしているようだから (p. 4)。

8. それゆえここで、ウィットゲンシュタイン哲学の性格づけが問題となろう。著者は「存在論の方法としての言語分析」(p. 12)という言葉で『論考』の哲学的営みの特徴

づける。しかしいったい、ウィトゲンシュタインが存在論、すなわち存在についての哲学理論に従事していたなどという解釈が可能であろうか。言語分析を方法とする存在論こそが『論考』の企てであるなどと、真面目に信じることができようか。というのも「哲学は何ら教説 (Lehre) ではなく、活動 (Tätigkeit) である」(TLP 4.112) から、さらに言えば、『論考』のもっとも知られた、もっとも印象的な諸節も、著者にとっては何ら重要でないように見える。

私の命題が解明を行うのは、私を理解する読者がそれらを昇ってゆき、その上に立ち、それを乗り越えたとき、ついにそれが無意義であると認識することによる。(読者はいわば、梯子を昇り切ったあとで、それを投げ捨てなくてはならない。) 読者はこれらの命題を克服しなくてはならず、そのときかれは世界を正しく見るだろう。(TLP 6.54)

話ができないことについては、ひとは沈黙しなくてはならない。(TLP 7)

いったい無意義な命題から成っている理論とは何なのだろう。——しかし著者は 6.54 節を「風変わり」(p. iii) という語で片づけ、7 節に至っては本書全体を通じて何の言及もない。それでは著者にとって、「世界を正しく見る」とはどのようなことなのか。どうやらそれは、概念記法 (言語 LW) をつうじて正しい存在論を把握することらしい (p. iv)。まるで世の人々は誤った「存在論」を持っており、かれらはこれまで世界を正しく見ていなかったかのようだ。そうではあるまい。ここで私見を述べるなら——概念記法を手にすることで、視界を歪める哲学的誤謬から解放され、答えのない問いに駆り立てられることのなくなったとき、我々はこの世界を曇らない眼で見ることができる。これが「世界を正しく見る」という言葉の意味である。正しく見ていないのは哲学する我々であって、世の人々ではないのだ (cf. TLP 6.5ff.)。『論考』の本質はその治療的性格にある。

9. 著者は現代論理学の諸前提 (対象言語／メタ言語、変項／図式、構文論／意味論といった区別など) を何の疑いもなく受け入れており、著者にとって『論考』解釈とは、かかる諸前提を無批判にウィトゲンシュタインに適用することでしかないように思われる。かくて啓蒙主義と時代錯誤が本書の解釈の特徴であり、これがテキスト軽視の傾向を生ぜしめている大きな要因だろう。(いま一つ挙げるなら、それは著者の現象主義である。) しかし、語ることをそもそも可能にするもの、語ることの基盤それ自体については、もはや語ることができない。——私見ではこれが『論考』を、そしてウィトゲンシュタインの全哲学を貫く根底的洞察である。(ウィトゲンシュタインは、形式話法 (formal mode of speech) という道具立てを導入したカルナプを、哲学的嗅覚を欠いた「鼻なし野郎」と呼んでいるし、またかれがメタ数学という企てに一貫して批

判的であったことは周知であろう。) この洞察を著者が受け入れているようには見えない。そのことは例えば「メタ言語という現代的な沃野」(p. 166) という表現にも窺える。しかし、ウィトゲンシュタインのこの洞察を拒否するなら、著者は何のために『論考』を読むのか。評者にはそれが不思議でならない。

10. 本書からは全体として、非ウィトゲンシュタイン的知性によるウィトゲンシュタイン研究という印象を受ける。これはいささかも悪口ではない。非ウィトゲンシュタイン的知性の代表はラッセルやカルナプといった錚々たる人々だから。だが、明晰さを希求するウィトゲンシュタイン的知性と理論構築による説明を目指す非ウィトゲンシュタイン的知性のあいだに大きな溝が存在するのも確かだ(フレーゲがいずれに属しているのかは興味ぶかい問いだ)。『論考』のたたえる深さに魅せられた者が本書にその解明を求めても空しいだろう。もちろん、多様なウィトゲンシュタイン像が提出されることは、日本のウィトゲンシュタイン研究にとって喜ばしいことではあるのだが。

(大辻正晴)